

演習科目におけるヤングアダルト文学の導入と課題

程 文清

帝京大学外国語学部

Abstract

This essay focuses on the instructional strategies employed in a fourth-year seminar class to encourage reading and enhance students' reading comprehension skills. The method blends reading-group activities into teaching methods of a seminar class that focuses on literature and culture of English-speaking countries. Students joined in-class discussion groups with peers who selected the same young adult book. The class's goals are to help students improve their reading skills and to expose them to different cultures by using young adult books as reading material. Based on ideas of collaborative learning, group activities are also intended to increase students' motivation for learning and reading. For their final individual presentations, Students were required to expand on the knowledge they gained from group activities and conduct research on issues pertaining to American and British culture. Weekly activity summaries, in-class observations, and a short questionnaire administered in week nine were used to track students' discussion and research. According to the students' comments, they enjoyed reading and group activities, learned new information through reading, and discovered that literary works can have different interpretations.

Key words college students' reading habits collaborative learning young adult literature reader-response theory

1. はじめに

1997 年に出版された全米英語教師協会 (National Council of Teachers of English) の機関紙『英語ジャーナル』(English Journal) において、ヤングアダルト文学研究者のテッド・ヒップル (Ted Hipple) は、当時アメリカの高校生の読書しない現状に危機感を覚え、“The THAT of teenagers' reading is vastly more important than the What” [1] と指摘した。つまり、「なに」かを読むよりも、生徒たちの読書習慣を育むことの方がはるかに重要であると彼は主張したかった。さらに、その状況を改善し、生徒たちに授業外でも楽しく本を読ませるには、従来の古典文学より、彼らが共感しやすいヤングアダルト文学(以下 YA 文学)が有効だと彼は力説していた。主にアメリカの高校生を中心に書かれている論文だが、現在の日本における大学生の読書問題にも通ずるものがあるだろう。

近年日本の大学生の「活字離れ」傾向が話題になっている。新聞などで大きく取り上げられて

いた、全国大学生生活協同組合連合会が毎年実施する「学生生活実態調査」を例に見ていくと、1 日の読書時間が「0」分と答えた学生の割合は、2017 年に 53.1% までに上がり、初めて過半数を超えた結果となった [2]。その後、コロナ禍の中で、状況がやや改善したものの、2021 年度の調査では、再び過半数の 50.2% までに増加した [3]。大学生の「読まない」あるいは「読めない」問題は多くの研究でも取り上げられ、改善策や授業案が数多く紹介されている。その中で、上村・西川・横川・堀井 [4] が論文「大学初年時次における読解力向上のための基礎的研究」で提案した、英語教育、日本語教育、国語教育の各分野で行われてきた教授法を結び付ける研究は、授業をデザインするうえで様々なヒントを与えてくれるものである。上村ほかは、学生たちは読まないだけでなく、読む習慣がないゆえに、「読むための基本的なスキル」、つまり「読解力 (reading literacy)」を持ち合わせていないと指摘する¹。読解力の理論については上村ほかの論文に詳しい²が、その読解力を高

A Short Report on the Effects and Challenges of Integrating Young Adult Literature in EFL Seminar Class

Wen-Tsing Cheng

¹ 参考文献 [4] pp.138 参照。

² 読解のプロセスに関して、上村和美、西川真理子、横川博一の論文 (139 頁) を参照されたい。

めるには、不足している「読む体験」と「読書量」を増やす方が有効であるという³。さらに、日本語教育や英語教育のそれぞれの分野において、多読やピア・リーディングは共通する効果的な手段であるという⁴。これらのアプローチを通して、学生の読書不足を解消し、読解に必要なスキルと知識を身に付けさせることはもちろん重要であるが、その前提として学生たちの自発的読書意欲を高めることも重要であると強調している⁵。

こうした先行研究を踏まえながら、筆者は2022年度後期に外国語学科英語コース4年生が対象の「英米文学演習 IV」科目にYA文学を利用したリーディング・グループの試みを導入した。グループと個人のプロジェクトがベースで、演習科目の形式を考慮しつつ、英語の読解を重視する授業スタイルを取り入れた。授業の目標の一つはもちろんテッド・ヒップルのように一人でも多くの学生に読書家になってもらうことであるが、「読む (reading)」だけで終わらず、読んだ内容を演習の活動に活かし、論理的思考力や表現力をも高めていくことも目標にしている。授業プランを作成する際には以下3点に留意した。まず、YA書籍の英語原作や英語の参考資料とともに、日本語の文献や翻訳の使用も推奨する。英語のままですばやく理解できるのは理想的ではあるが、宗教、政治、歴史など様々な面で背景知識を持たない学生たちには、必ず理解しにくい表現や描写があることは明白である。そういう時は、翻訳、場合によって映像作品を適宜参照して、「読めない」挫折感を軽減することができる。とともに、授業が終わった後も英語や日本語を問わず、自発的に本を読むことを期待できるだろう⁶。つぎに、演習科目の学生主体の授業形式に従い、グループワーク、ディスカッションなど協同学習の要素を多く取り入れ、学生間の学び合いを促し、読書や学習に対する意欲の向上を図る。

³ 参考文献[4]pp.142 参照。

⁴ 参考文献[4]pp.148 参照。

⁵ 参考文献[4]pp.141 参照。

⁶ 外国語の英語での読書活動は学習者の読書習慣づくりにどのような影響を与えるかについては荒木陽子氏のプロジェクトを参照されたい。

さらに、学生が読んだ内容に反応し、自由に自分の意見や考えを発表する活動を用意することである。比較的共感しやすいYA作品であるため、学生は自分の経験や知識を作品の世界と照らし合わせ、「意味」や解釈を作り出すことができるだろう[5]。

本稿では、全体の流れに沿って、授業の概要や特徴を紹介してから、授業中に実施した簡単なアンケート調査の一部を利用し、英語で原書を読むことに対する学生の反応や意見について考察し、今回の実施で見えてきた課題も合わせて分析していく。

2. 授業概要と対象

「英米文学演習 IV」は外国語学科の専門教育科目に属する演習科目群の一つとして開講されている。演習科目は、他学科で開講しているゼミナールに当たる授業形態で、学生が主体的に研究テーマを選び、教員の指導のもとで特定の専門分野についてより深く学修や研究する科目である。主に少人数で討論と発表を中心に行われている。本授業の達成目標は以下の4つである。

- ① 豊かな感性を養い、英語圏の文化と文学へのアプローチ方法を習得することができる。
- ② 英語圏の社会・文化・歴史に関するテーマについて、英語で書かれた文章を読み書きできる。
- ③ 自ら設定した研究テーマに関連する資料を収集・分析し、学術的な方法を通じて仮説を検証することができる。
- ④ 特定のテーマについて、口頭発表やレポートなどを通じて分かりやすく論理的に他者に伝えることができる。

本来3,4年生合同開講の外国語学科の演習科目は様々な理由で、2022年度後期は4年生のみの開講となった。履修者12名のほぼ全員が2年次の後期から筆者の演習科目を履修している。以前の授業では『ハリー・ポッター』シリーズや『ハ

ンガーゲーム』の原書に多少触れたことがあるので、読むことに対して比較的抵抗感が薄いと云える。この学生たちを対象に、今回はブッククラブ形式のリーディング・グループを導入し、原書を使った読書活動を、グループワークやゼミ発表活動と結びつけた授業スタイルをとった。この試みが始まってからまだ年数が浅く、データも不十分だが、学生のグループや個人発表の結果や、授業中に行ったアンケートから、一定の学習効果があることが確認できたので、今後も見直しながら継続していく価値があると思われる。さらに、英語を専攻する大学生の演習科目において、いかに原書を授業に取り込み学生の読む習慣を育てていくかを考える際、本授業の試みは授業デザインの一例になることは期待できる。

早い段階から授業内容や本に興味を持ってもらえるように、後期授業開始の2週間前から、Zoomのチームチャット機能を利用して、受講生全員にシラバスと推薦図書リストを周知し、本についてリサーチするよう促した。活動の詳細は本稿の後半で説明するが、表1は第9週目までの流れを示すスケジュールである。学期の前半では、同じ本を選んだ者同士でグループを作り、個人による読解と授業中のブッククラブ活動を通して作品への理解を高めてから、グループの発表で前半を締め括った。後半は前半の学修のうえでさらに学びを深めていく個人ベースのリサーチ、発表と討議を中心に授業を行った。

表1 授業スケジュール (第9回まで)

授業回	授業内容
第1回	Introduction 導入:シラバス説明, YA 書籍とリーディンググループ活動について
第2回	Mini lecture: History of youth culture and YA literature ① Reading group discussion ①
第3回	Mini lecture: History of youth culture and YA literature ② Reading group discussion ②

第4回	Mini lecture: Issues in YA literature Reading group discussion ③
第5回	Mini lecture: Young adults and reading Reading group discussion ④
第6回	Prepare for group presentation Reading group discussion ⑤ グループ発表の最終準備
第7回	Reading group presentations ①② Questions and discussions
第8回	Reading group presentations ③④ Questions and discussions
第9回	Survey on reading experience グループ発表のまとめと個人発表 直前準備

3. 授業方法

3.1 YA 文学を取り入れた演習活動

「英米文学演習」はその名の通り、英米文学の題材やテーマにフォーカスして、研究、討議、発表などを通してこの分野に対する見識を深めていく科目である。以前の授業では、エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe), アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)などアメリカ文学を代表する作家たちの作品を取り上げてきたが、英語で文学を読み慣れていない学生にとっては、原書のハードルが高かったようだ。作品の面白さを理解できた学生はごくわずかで、途中で読むことを諦めた人もいたので、授業内容を映画題材にシフトした時期もあった。2021年度から、徐々にYA文学の導入を含めた内容の見直しを行い、今回の授業デザインに至った。大学の専門教育科目にYA文学を導入することに対して批判的な意見もあるだろうが、荒木陽子が指摘したように、「ヤングアダルト文学は古典文学への橋渡しとして欧米の教育現場で用いられている」[6]ことや、YA書籍における英米文学のキャンオンへの言及が多く含まれている理由から、このジャンルの作品は英語学習者の大学生にとって、英語圏文化と文学を研究する際の優れた研究対象になりうると同時に、

さらに高いレベルの学問や教養を目指すための準備段階と言えるだろう。

では YA 文学はどのようなジャンルで、英語学習者にとってどのような利点があるだろう？ここに YA 文学の歴史を簡潔にまとめる。⁷現在世界で広く読まれている YA 文学は第二次世界大戦後のアメリカに誕生し、その後も主に英語圏で発展を遂げてきた。1950 年代のアメリカでは、戦後経済の好況とともに、「ティーンエイジャー」世代が登場し、この年齢層を対象に作られた映画や音楽など若者文化が流行っていた。文学も新しい世代の需要に応える形で、「ジュニアノベル」から、1957 年によくヤングアダルト文学という呼称に定着し、内容や表現において大きく成長した。若者向けに書かれていなかったが、J. D. サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』は、その内容から、しばしば最初の YA 小説として挙げられてきた。サリンジャー作品の影響を受け、1960 年代末から続々と出版された S. E. ヒントンの『アウトサイダー』やロバート・コーミアの『チョコレート戦争』などの作品は本格的な YA 文学の到来を象徴する作品となった。これら初期の作品の多くは、暴力、薬物中毒、同性愛、家庭問題のような以前の児童文学でタブー視されてきた若者の現実をありのまま描き出したリアリズムの作品で、「問題小説」とも呼ばれていた。

その後 90 年代の後半から、ヤングアダルト文学は第二次黄金時代を迎えている。優れた作品を表彰する初めての YA 文学賞、プリンツ賞 (Michael L. Printz Award) がアメリカ図書館協会より創設され、2000 年にウォルター・ディーン・マイヤーズ (Walter Dean Myers) が初の受賞者となった。その人気は世界的に広がり、作品の内容、ジャンル、表現方法においては多様化の様相を見せている。例えば、LGBTQ 問題、障害、難病、人種など現代社会が抱える諸問題がテーマとなり、グラフィックノベルやコミックなどの表現方法

も新たに加わった。さらに、読者層も 10 代の若者から、25 歳前後へと広がり、とくにクロスオーバー作品は世代を超えた読者に読まれるようになった。世界的なベストセラー『ハリー・ポッター』、『ハンガーゲーム』、『トワイライト』シリーズはこのジャンルの代表的な作品である。

英語教育における YA 文学の導入の利点について、すでに多くの研究で証明されている。本授業デザインの理論的根拠にもなっているので、要点を簡潔にまとめることにする。まず、なぜ文学が英語学習者にとって優れた題材になれるかについて、ウー (Yongan Wu) [9] やエルズワース (Christine P. Ellsworth) の論文によると、その理由は以下の 3 点である。第一に、言語の面において、文学はオーセンティックテキストなので、英語で文学を読むことによって、「正確な表現」、「多様な文型」に直に触れることができる。第二に、文学を通して、文化と社会に関する認識を深められる。第三に、多様な文化や経験を知ることができ、読解力の向上とともに、「多角的な視点」、「批判的思考力」の育成も期待できる。上記のような利点以外に、英語学習者にとって YA 文学ならの良さとしては、まず、ウーの言葉を借りれば、YA 文学は「シンプルで」、「現代的な」英語で書かれているため、難易度において英語学習者に適している。2 点目は、「自己発見と成長」、「人間関係」など年齢が近い大学生にも共感しやすいテーマを扱っていることで、古典文学より敷居が低く、親しみやすい⁸。さらに、YA 文学には、ファンタジー、SF、ディストピア、歴史小説など多様なジャンルがあり、英語学習者に幅広い選択肢を与えられる⁹。

YA 文学のメリットを活かし、今回の推薦図書は①評価の高いもの、②学生にとって興味関心がありそうなもの、③新しい世界観や考え方に会えるもの、④語彙や表現が比較的平易なものを基準に選び、またなるべく多くのジャンルを網羅するように工夫を重ね、最終的に 7 冊の本に決まった。

⁷ YA 文学の歴史的流れは主に Michael Cart の論文 [7] をもとにまとめたものである。白井澄子氏の講座配布資料 [8] を併せて参照されたい。

⁸ 文学や YA 文学の利点については、Yongan Wu の論文を参照されたい。

⁹ 参考文献 [5] pp.19 参照。

配布するリストに書名, 作者, 出版社などの基本情報のみならず, 本の内容をよりイメージしやすくするために, それぞれの本についてニュートラルで客観的な紹介を一文入れた。上記取り組みによって, 本の質を確保するとともに, 学生に選択の自由もある程度与えた。さらに, 受講生は本のリストをもとにリサーチし, 内容について予測を立て, そして「読んでみたい」, 「面白そう」, 「気になる」のような期待を持って能動的に本と向き合うことができると思われる。その後, 学生に読みたい本を第 3 希望まで出してもらい, 同じ本を選んだ者同士で 3 人ずつの 4 グループを作った(表 2 本のタイトルを参照)。4 番目のトレバー・ノアの『生まれたことが犯罪』は厳密的に言えば, YA 作品ではないが, 少年の成長など YA 作品と共通するテーマを扱っており, またこの本を通して普段の生活の中で接することが少ない南アフリカの歴史と文化を知ることができるので, あえてリストに入れた。

表2 本のリスト

『ハウルの動く城』 <i>Howl's Moving Castle</i> (1986)
『ザ・ギバー: 記憶を伝えるもの』 <i>The Giver</i> (1993)
『アラスカを追いかけて』 <i>Looking for Alaska</i> (2005)
『生まれたことが犯罪』 <i>Born a Crime</i> (2016)

3.2 リーディング・グループの活動

この活動では, 授業は教員主導から脱却し, 「学生が小さなグループで協力して学問的内容を学び合う」¹⁰協同学習の教授法を取り入れた。活動のねらいは, 本の内容に関する意見交換や教え合いなどメンバー間の相互作用によって, 学習意欲が高まり, 学びや読書に対する態度が変化し, 読解力や英語力の改善にもつながるこ

とである。この取り組みの実施においては, 次の 3 点を重視して行った。

- ・ 目標と実施方法を明確にすること
- ・ リーディング・グループ活動の時間を確保すること
- ・ 各グループの様子を常に把握し, 適切に助言すること

初回の授業で担当教員が説明したリーディング・グループのねらいや実施方法等は表 3 の通りである。リーディング活動は, 第 2 週から第 6 週までで合計 5 週間の間, 毎週 40 分前後の授業時間を利用して実施した。各グループの進捗状況については, 学生が提出した「活動まとめ」(meeting summary)や授業中の観察で把握することにした。「活動まとめ」を読み, 一部はコメントをつけて返却し, 必要があれば学習面或いは活動面のアドバイスをを行った。

前半の読書やグループ活動で得られた本に対する理解, 考え, 見解に基づき, メンバー全員が協力し合って発表を作り上げ, 前半の授業を締め括った。発表の時間制限は 20 分程度で, 全て英語で行うことにした。そして, 発表内容は必ず下記 3 点をカバーし, 形式は自由で, 各グループが選んだ作品の特徴を最も表現できる形にもらった。

- ① 作者, ストーリー, 登場人物の紹介及び説明
- ② 面白かった部分あるいは印象に残ったシーン
- ③ 作品のテーマやメッセージについて

結果として, グループ発表は学生たちの課題解決能力, 協調性, 想像力(創造力)を発揮する良い機会となった。本稿では各グループ発表の詳細を省くが, 例えば, 「模擬作家インタビュー」の面白い構成で発表したグループや, 歴史背景を説明しながら作品のメッセージを丁寧に分析したチーム, また原作と映画の違いを考察したものなど多様な発表があった。その中で最も印象に残ったのが作品の Reading Guide を制作し, クラス

¹⁰ 協同学習については, 館岡陽子氏のピア・リーディング理論[10]や Slavin 氏の論文[11]を参照されたい。

メイトに作品の概要と特徴を解説したチームの発表である。

表3 リーディング・グループの
実施方法と学生役割

<p><u>目標</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自ら選んだ YA 書籍一冊を最後まで読み切る。 ・ ほかのグループの本に興味があれば、挑戦してみる。 ・ 作品の内容、登場人物、作者、関連性があるテーマについてグループ・プレゼンを通して、簡単な英語で説明することができる。
<p><u>実施方法</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事前準備 グループで進度を決め、各自で所定ページを読む。 疑問点や質問を用意し、グループ活動の準備をする。 ・ リーディング・グループ活動内容 <ul style="list-style-type: none"> ・ 読んだ部分の内容確認 ・ 質問や疑問点について議論し教え合う ・ 内容やテーマに関連する事柄について討議する ・ グループ・プレゼンの準備 ・ 毎週活動終了後、グループごとに英語の“Meeting summary” (about 300 words in English)を提出。一人につき、全体の活動終了まで計2回の提出が必要。
<p><u>メンバーの役割</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 諦めずに本を読んでしっかり準備すること ・ グループの一員として責任を持って、積極的にグループの活動に参加し貢献すること ・ ほかのメンバーから知識・スキル・勉強法を学ぶこと ・ グループの活動を通して、自分の持っているスキル・知識について認識・発見しさらに高めていくこと。 ・ グループ全員で決めたルールや役割分担をちゃんと守ること

3.3 学生個人によるリサーチと発表

グループでの活動が一段落し、学期後半の9週目から、学生個人によるリサーチと発表を中心に授業を行い、前半の学びをさらに深化させた。前半と後半の授業を貫くアプローチは、主体的に文学作品と向き合い、作中の出来事や人物に対して「自分のアイデア、意見、感情」[12]を表現するよう学生に促すことである。このアプローチは、近年 EFL や ESL の授業において提唱されている読者反応理論 (Reader-Response Theory) に基づく文学作品の教授法からヒントを得ている。アマー (Aly Amer) によると、読者の反応を「重視する」この理論では、リーディングの行為は「内省的かつ創造的な」プロセスである。読者は過去の経験、知識、価値観等に基づき、作品と「相互作用」しながら、自分なりの解釈を構築していくという¹¹。この方策を取り入れることによって、読書に対する学生の興味関心を高め、多様な考えや「批判的思考」に気付かせることができた。さらに、自分の考えや「解釈」を説得力のあるものにするために、作品をしっかりと読み解きその面白さを理解することが大前提であると同時に、作品の背景を知ること、考察の根拠を明確にすることの重要性についてディスカッション等を通して強調した。以上のポイントを念頭に、リサーチの個人と全体指導を行った。

個人発表は後半に予定していたが、初回の授業の時に受講生に全体の方向性を周知し、学期を通して研究テーマとしっかり向き合ってもらうことにした。前半授業との連続性から、グループ発表で扱った作品や、YA 文学に関連するテーマ、大学生と読書、日本の若者文化などの分野で発表の内容について提案したが、具体的なテーマは学生の「興味」に基づき自由に設定してもらった。個人発表の時間制限は15分から20分程度で、使用言語は英語か日本語のどちらを選ぶことにした。発表後に提出するエッセイを必ず英語で作成することによって、英語ライティングのスキルも最大限に伸ばせるように工夫した。学生たちが時間をかけて準備した結果、内容について深く掘り下

¹¹ 参考文献[12]pp.68 参照。

げた発表は多数あった。YA 文学に関するものだけでなく、作品に触発され、若者文化、社会が直面する諸問題まで研究が広がった。下記は一部発表のタイトルである。

- ・ *Looking For Alaska* における映画「ハーヴェイ」の影響
- ・ 1950 年代のイギリス児童文学とファンタジー
- ・ 「なぜ長女が成功しないのか」—出生順番による期待の差
- ・ 教育の現場における LGBT 問題
- ・ 学習マンガに学習効果があるのか？
- ・ 日本の母子家庭における貧困と教育問題

4. まとめと今後の課題

リーディング・グループの試みを導入した本演習科目は二つの面から、受講生の素養とスキルの向上を目指した。文学の素養の面では、YA 文学を使った読書、とりわけ英語での読書活動を通して、受講生は英米文学へのアプローチ方法を学び、多様な解釈の面白さに触れることができた。そのうえ、自ら設定した研究テーマに関連する資料や文献を分析し、根拠を踏まえつつ、論理的に発表や論文を構成するスキルも実践を通して高めた。次に英語力の面では、オーセンティックテキストである YA 書籍を読むことによって、自然な表現と多様な文型が大量にインプットされ、さらにディスカッション、発表、ライティングなどの活動の中でアウトプットもバランスよく行われ、総合的英語力の向上にもつながったと思われる。

前半のグループ活動の終了後に行われた調査からも今回の取り組みに一定の効果があったことが分かった。今回の調査は、受講生の読書習慣と読書に対する意識を知ろうとする非常に簡単なものである。全部で 8 問があるが、そのなかの Q8 は今回のリーディング・グループの取り組みに関する質問で、学生の感想を知るための重要な質問であるので、本稿ではこの質問と学生の自由記述式回答を取り上げることとする。当日(2022 年 11 月 24 日)履修者 12 名の中 1 名

欠席で、11 名が調査に参加した。

Q8 今回のリーディング・グループの活動に参加して、自分の「読書体験」についてどう思いますか？ (How do you describe your reading experience for this semester's group reading project?)

回答者 11 名のうち、10 名からは今回の読書体験と YA 文学を利用した読書活動を評価するポジティブな記述があったので、今回の取り組みが有効で、読書に関して学生に良い影響を与えたと言える。さらに、下記 A1 と A4 の答えに書いてある通り、学生が「読みたくない」のではなく、就活などで読む時間がなかったことや、「読む体験」と読書量が少なかったことがうかがえる。また、3 番目の回答のように、YA 小説や本に関する知識が少なかったことも分かった。以上の結果から、授業の中で、いかに効果的に本に触れる機会や読書量を増やして、大学での学習に不可欠である「読む」こと、あるいは専門の観点からいえば英語で読むことに対する学生の苦手意識を軽減していくかは今後の課題の一つである。

A1. At first, it was difficult because of job hunting. But once I got time to read it, I enjoyed it.

A2. I think it was valuable experience to understand different culture.

A3. It was fun and new experience for me. "Looking for Alaska" is really thoughtful and we searched a lot. Before taking this Seminar, I didn't have knowledge about YA novels.

A4. Before the group presentation, I was not often read books. So, I thought it difficult to read books in English for me. But after reading, I could know many new words and I knew I can read a book in English. So, I was happy to know that.

(原文のまま)

そのほか、リーディング・グループの取り組みに関する記述も下記 A5-A7 の通り数件があり、グ

ループメンバーと切磋琢磨しながら、自分と他者の意見を比較し、学び合いのなかで自分の意見や考えを明確にしていく教授法を学生は理解していて、また学習効果も確かにあったことがうかがえる。今後の授業でもペアやグループの読書活動を積極的に取り入れていくが、今回以上に実施方法、目標設定、またメンバーの役割についてももっと丁寧に検証し、明確にする必要があると思われる。

A5. We were able to share our different interpretations for “Looking for Alaska.” As we discussed, we came to have our interpretation on it.

A6. We finished reading “The Giver” about two weeks ... I tried to exchange my interpretations with my group members.

A7. Our group read “Looking for Alaska.” Through my reading experience, I learned the importance of reading and interpreting the book in my own way.

(原文のまま)

引用は9回目の授業内(2022年11月24日)調査から

一方、授業で行われた読書活動や発表にやりがいを実感しながらも英語での読書を「難しい」と感じた学生がいたのも事実である。11名のうち3名の学生から、「単語が難しい」、「言葉の意味が曖昧」、「設定が分かりづらい」の理由が挙げられている。これに関しては、読書の体験が少なく、読書量も不足している状況に起因していると考えられるが、今後の授業内外の工夫により改善の余地があると思われる。今回は4年生で、英語で文学を読むことを多少経験した学生を対象に、「大量に読む」、「楽しく読む」という多読よりのスタンスで授業をデザインし実施したが、今後低い学年の授業から導入し、長いスパンでより確実に学生のスキルを伸ばす授業法を考案したい。その場合、学生の状況に合わせて、作品選びや実

施方法をもっと丁寧に練り直していく必要があるが、物語の設定、文学的表現の特徴といった英語圏の文学の読み方に関する事前指導をより効果的に取り入れる方策も考えていきたい。

参考文献

[1] Hipple, Ted. “It’s the THAT, Teacher.” *The English Journal*, vol.86, no.3, 1997, pp.15–17.

JSTOR, <https://doi.org/10.2307/820639>. Accessed 8 Mar. 2023.

[2] 全国大学生生活協同組合連合会「第53回学生生活実態調査の概要報告」, <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report53.htm> 1, 最終参照 2023年3月8日

[3] 全国大学生生活協同組合連合会「第57回学生生活実態調査の概要報告」, https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report57.pdf, 最終参照 2023年3月8日

[4] 上村和美、西川真理子、横川博一「大学初年次における読解力向上のための基礎的研究」『研究紀要』, 第4号, 2009, pp.137-149

[5] Ellsworth, Christine P. *An Argument for Young Adult Literature in the Adult ESL Classroom*. 2011. Ball State University, MA Thesis. Core, <https://core.ac.uk/download/5013257.pdf>

[6] 荒木陽子「『多読 to 読書』プロジェクト 2014: 英語多読学習を介在した日本語読書習慣づくりにむけて」『人文社会科学研究所年報』14号 敬和学園大学, 2016, pp.61-73, <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000007375558-00>, 最終参照 2023年3月8日

[7] Cart, Michael (2016) "Young Adult Literature: The State of a Restless Art," *SLIS Connecting*: Vol. 5 : Iss. 1, Article 7. DOI: 10.18785/slis.0501.07.

[8] 白井澄子「英語圏の児童文学と図書館活動」『令和2年児童文学連続講座配布資料』国立国会図書館国際子ども図書館、2020年11月10日、講座（最終参照 2023年3月8日）<https://guides.library.unr.edu/mlcitation/instructor material>

[9] Wu, Yongan. “Teaching Young Adult Literature in Advanced ESL Classes.” *The Internet TESOL Journal*, vol. XIV, no.5, The Internet TESOL Journal, May 2008. <http://iteslj.org/Articles/WuYoungAdultLiterature.html>.

[10] 館岡洋子『ひとりで読むことからピア・リーディングへ』, 東海大学出版会, 2005

[11] Slavin, Robert E. “Cooperative Learning and Academic Achievement: Why Does Groupwork Work?” *Anales de Psicología*, vol. 30, no.3, 2014, pp. 785-791. Redalyc, <http://www.redalyc.org/articulo.oa?id=16731690002>

[12] Amer, Aly Anwar. “Teaching EFL/ESL Literature.”, *The Reading Matrix*, vol. 3, no. 2, September 2003, pp. 63-73. The Reading Matrix, <https://www.readingmatrix.com/articles/amer/article.pdf>